

第29回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 令和2年1月28日（火曜日）13時00分から14時00分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 青柳評議員、浅葉評議員、太下評議員、キャンベル評議員、
仲道評議員、日比野評議員、吉本評議員、小池知事
- 4 議 事 (1) 都の文化政策の今後の方向性及び2021年度以降の文化施設の運営
について
(2) Tokyo Tokyo FESTIVAL の展開及びプロモーションについて

5 発言内容

○青柳会長 それでは、ただいまより、第29回の東京芸術文化評議会を開催したいと思います。

今日は本当に、皆様、お忙しい中、ありがとうございます。

本日は、7名の評議員の方に御出席いただいております。

早速ではありますけれども、ここで小池知事から御挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

○小池知事 皆様こんにちは。御多忙のところ、本日、第29回になりますが、東京芸術文化評議会にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

今年、2020年、ついにやってまいりまして、あと178日というのが今の段階でございます。先週もお台場で半年前のセレモニーをいたしまして、オリンピックのモニュメントに点灯すると。そして後ろがレインボーブリッジで、とてもイーストパレスの、一言で言うとすばらしいマークといいますか、モニュメントができました。

と同時に、この「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のほうも、皆様方の御協力を得まして、いろんな形でこれまでも進んでまいったところでございまして、スポーツの祭典だけでなく、文化の祭典ということで、世界へ発信する、文化を発信するということで、皆様方の御協力を得まして、世界へ伝えていきたいと考えております。

きょうはこのTTF、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」もこれからまさに最高潮を迎えようとしておりますので、そのラインナップとPRの展開について御説明をさせていただき、また、そこから皆様方の御意見を伺うことによって、より拡散、より広めていく、より大きな感動を提供していきたいと考えております。そのことが大会のレガシーにもなっていく、このことを期待をしているところでございます。

それからちょっとこちらのほうに2冊、薄いのと分厚いのと2種類ございますが、これは「未来の東京」戦略ビジョンということで、さまざまな分野の、こうありたい、こんな未来はいいなというので、2040年を目途に、そこに焦点を当てながら、2030年ま

でに何をすべきかということをもとめたものでございます。

ちなみに、この表紙の絵ですけれども、これは小学校1年生の子供さんが描かれた絵でございまして、そして、車が浮いていて、小学校が浮いていて、つまり自分が大きくなったときにはこんな東京がいいなということで、いろいろなものが浮いている。それから、地面は基本的に全て公園。そして家が下にあるのは、これは海面が上昇して、これからは地中に住むとか、もっとすごいのは水中に住むとか、いろいろ子供たちの独創的な、その割にトマトは50円と書いてありますのでリアルなところもございまして。ぜひ御一読いただければ。また、文化の面についても触れておりますので、1つアドバイスを頂戴できればと、このように思っております。

TTF、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のコンセプトは、「文化でつながる。未来とつながる。」でございますので、未来に向けての文化のエネルギーをこれからも皆様方とともに詰めていきたいと、このように考えております。どうぞよろしく願いいたします。

○青柳会長 ありがとうございます。それでは次第に沿って進めてまいりたいと思います。

本日の議事は、公表前の内容が含まれておりますので、運営要綱に基づいて会議を非公開とし、後日資料や議事録を公開したいと思っておりますが、いかがでございでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○青柳会長 ありがとうございます。それでは、異議がないようでございますので、そのように進めさせていただきたいと思っております。

それでは、大変恐れ入りますけれども、報道機関の方々におかれましては、御退席をお願いいたします。

(報道関係者退室)

○青柳会長 それでは、本日1つ目の議事であります「都の文化政策の今後の方向性及び2021年度以降の文化施設の運営について」、事務局のほうより御説明をお願いいたします。

○文化振興部長 はい。それでは初めに、先ほど知事からも御説明いたしましたけれども、「未来の東京」戦略ビジョンについて御説明いたします。

東京都は2040年度の未来の東京の姿を、2030年に向けての課題ということで、20の戦略と120の推進プロジェクトを立ち上げることにいたしました。取組を通じまして、セーフシティ、ダイバーシティ、スマートシティ、この東京が目指す3つのシティを進化させ、成長と成熟の両立した未来の東京を実現してまいります。本日は芸術・文化に関する部分を御紹介いたします。

2040年代の東京の姿は、文化やエンターテインメントで世界を引きつける東京でございます。洗練された伝統文化や芸術、ファッションなど、さまざまなコンテンツがたがり、世界で歩くのが最も楽しい、憧れの的である、世界中のアーティストの卵が修行を

求める登竜門である、また地域の個性を生かした文化の催しが行われている、東京が日本と世界の結節点となり、日本中で文化交流の好循環が実現している姿を描いております。

このビジョン実現のための戦略が文化エンターテインメント都市戦略でございます。2020大会の跳躍台としまして、東京が持つ魅力的な資源を磨き上げ、芸術・文化やエンターテインメントを存分に楽しめるまちをつくるとして、ここでは都の文化施設がコアとなり、東京の多様な魅力を世界に発信することを挙げております。

「未来の東京」戦略ビジョンを受けまして、都の文化政策として、今後、次の6つの視点を強化いたしまして、芸術・文化のにぎわいをもたらすとともに、福祉や観光、まちづくりなど、都市東京の成長にも寄与する政策を推進したいと考えております。

幾つかの視点を御説明いたします。

まず、都市力の強化でございますが、芸術・文化の担い手であるアーティストの発掘や、国内外での活躍を支援し、東京発のアーティストの国際的評価を高めてまいります。また、文化の創造発信とエンターテインメント性向上により、多くの人を引きつけるまちとしてまいります。

次がネットワークの強化でございます。都立文化施設がコアとなり、国や民間の文化施設を巻き込み、世界中から人が集まる環境をつくるということで、外国人向けのキャッシュレスパスや、新たなにぎわい創出に向けたアートフェスティバル、ナイトミュージアム拡大にも取り組んでまいります。

3つ目が、参加・体験機会の拡充でございます。大会に向けたプログラムを、多くの方が楽しんでおまして、そのレガシーとして、「アート・カルチャー体験100」として、多くの方が参加、体験していただけるプログラムをウェブサイトで公開し、これを国や民間の施設にも拡大していきたいと考えております。また、本日プレス発表予定ですが、都立文化施設で、18歳以下の方を対象に、全ての展覧会を無料開放する取組をトライアルとして進めてまいります。

4つ目は、テクノロジーの活用でございます。民間からテクノロジー活用の提案を募集するなど、新たな鑑賞体験の提供を行ってまいります。

5つ目は社会課題の解決への貢献でございます。「人が輝く東京」という戦略ビジョンの趣旨を受けまして、アートの力は都立文化施設の資料を活用し、高齢化や共生社会など、文化の連携を超えた東京の社会課題の解決に取り組んでまいります。

その1つ目が、社会インフラとしてのクリエイティブ・ウェルネスでございます。各館の特徴を生かしたプログラム、また現在展開している大会のリーディングプロジェクト「TURN」とも連携し、NPOなどとも、共に取り組んでまいります。

次に、地域に対応したクリエイティブ・ウェルネスでございます。地域でアートプロジェクトを実施することで、コミュニティの衰退などの課題にも対応してまいります。

今後は、これらの取組をスピード感を持って進めつつ、大会で創出されるレガシーを見

据えまして、長期ビジョン等と連動し、東京の成長に寄与する文化政策を検討してまいります。

続きまして、2021年度以降の文化施設の運営についてでございます。

都立文化施設は2020年度まで、東京都歴史文化財団の指定管理で運営しておりますが、2021年度以降は、ただいま御説明したような方向性に加えまして、コアとなる都立文化施設のトータルの運営と発進力強化などが必要でございます。そのため、政策連携団体である歴史文化財団を活用した指定管理の選定手続に着手してまいります。

説明は以上でございます。

○**青柳会長** ただいま事務局より説明がございました、都の文化政策の今後の方向性及び2021年度以降の文化施設の運営につきまして、文化政策部会で議論していただいておりますので、部会長の太下先生、お願いします。

○**太下評議員** はい。文化政策部会のほうで、この都立文化施設の運営のあり方について議論させていただきまして、きょう報告があったとおりました。オリンピックの文化プログラム、そして今後の戦略ビジョンの実現に当たってのコアになりますこの都立文化施設の運営方針がこのタイミングで確定しましてよかったと思っております。

今後のことはまた後でお話しします。

○**青柳会長** はい、ありがとうございます。それではまた後ほど御意見をいただくことにしまして、何か今の説明に対して何か御意見、どうぞ。

○**日比野評議員** 今ほど説明していただいた中で、特にこの23ページ、24ページのところのことについて、ちょっとお話しさせていただければと思いますけれども、社会課題解決への貢献というところで、これからいろいろ多様な社会を築いていく上で、やはり芸術・文化が持っている多様なものを受け入れる、それこそが地域込みのその人の魅力であるというその考え方が、まずは一番社会の組織のインフラとして据えることが一番大切だと思います。

その中で、ここでクリエイティブ・ウェルネスセンターという提言をされていますけれども、これまでの文化施設、そしてこのリーディングプログラムとして行わせていただいている「TURN」プログラム、丸々4年、今度5年目になりますけれども、その中で培ってきた経験値、そして関係性というものが、まさにこの21年以降、きちんとそれを組織立って、都として、行政として、そして、この中でちょっと、23ページにありますけれども、東京藝大との連携というものも「TURN」は今行っておりまして、この部分では藝大が、国内じゃなくて海外との大学の連携を特に行っております。海外での芸術大学でも、今、同様に、社会的な課題を芸術がどのように解決できるのかということを専門的に研究して実践していこうという大学が多々ありまして、その部分で芸大と組んでおります。

ある分では、藝大が東京都が、そして「TURN」がオリンピック文化プログラムとし

てそれをリーディングして発信していくということが、ほかの国よりも一歩推進役になっているということが、いろんなアートフェスティバルへの招聘にもなっております。

特に、南米、ブラジルがきっかけで、このリオのオリンピックのときに「TURN」が始まりましたので、その後、アルゼンチンのビエンナーレスール、そしてキューバのハバナビエンナーレに、この「TURN」プログラムが招聘されている。いわゆるこの「TURN」プログラムとか、ダイバーシティの試みが、1つの日本の文化として推進されている。それが新たな日本の文化としてなっているということにも今なりつつあるかなと思っておりますので、ぜひこの社会課題の解決への貢献のクリエイティブ・ウェルネスセンターというものは、21年以降しっかりとやっていければなどは考えております。

○青柳会長 ありがとうございます。今おっしゃっている……、失礼しました。ちょっと。1つだけコメントを。

国のほうでも、文化庁と厚生労働省が合同で、アール・ブリュットの拠点推進計画を、法律まで通してやったんですけども、そういうのも、都のあれを見習ってやっているんですね。ですから、いつまでも都はこういう先端性をぜひぜひ維持してほしいと思いますね。

○吉本評議員 はい、ありがとうございます。今の御説明の中にあつた2020大会で創出されるレガシーを見据えた展開ということで、3つ提案をさせていただきたいと思えます。

オリンピックの招致活動以降、東京都はいろんな文化事業をやってきておまして、例えば「六本木アートナイト」とか、「パフォーマンスキッズ・トーキョー」とか、いろんなものがあるんですけど、これはオリンピック招致がきっかけで始まってはいるんですが、2020年以降も、ぜひ積極的に展開をしてはどうかというふうに思います。

もちろん全部やっていくというのは難しいと思いますけれども、例えば「東京アートポイント」などは、都立文化施設ではカバー仕切れない政策領域等を含んでおりますので、六本木アートナイトのような東京の顔になるものと、地域に結びついたもの、その二本立てで、ぜひぜひ継続していただけたらというのが1点目です。

2点目は、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」では4種類の助成が行われているわけですが、こちらも2020までということをやっていたんですが、4つ全部ではなくてもぜひ継続したらどうかなというふうに思います。とりわけ、未来型と海外発ですね。未来型はテクノロジーを応用するということですので、「未来の東京」戦略ビジョンにも記載のあった最先端技術にも通じます。

そして海外発に関しては、実は大きなニーズがあるんですね。TTF助成を行った東京ビエンナーレという事業があるんですけども、そこがオープンコールで海外から提案を募ったら、何と1,500件も応募があつて、何かサーバがパンクしたそうなんです、締め切り直前に。つまり東京というのとビエンナーレが結びつくと、それだけ吸引力があ

るといふことで、海外アーティストの受け皿となるためにも、海外発はぜひ続けたらどうかと。

そしてもう1つ、これはちょっとハードルが高いかもしれませんが、「スペシャル13」で実現できるものというものは、やっぱりオリンピックだから特別ということだと思っておりますけど、それと同じものを毎年、せめて1個だけでも続けられれば、「スペシャル13」で培ったいろんなノウハウというんですかね、それを継続できるし、東京の文化の顔としても育つんじゃないかなというふうに思いました。

以上3点です。

○青柳会長 ありがとうございます。事務局からほかにも……、ああ、どうぞ。

○仲道評議員 具体的な御提案ではないのですが、今の吉本さんのお話「地域に結びついたもの」というお話がありましたが、それとも少し関連するかと思っておりますので一つ申し上げます。地方の公共ホールを回っておりますと、やはり地域のミッションとして何をしていくのかということがとても問われていて、ホールの方々もそれぞれに頑張りたいと思われているのですが、しかしながら人とお金が足りないのでできないという現状があります。

指定管理者の導入についても、さまざまな制約とか、ビジョン、ミッションをいかに構築し共有して進めていくかということなどについて、うまくいかないことも多々起きています。今後2040に向けての方針をどのように進めていくかというときに、その組み立て方として、人と、財源と、それから指定管理者のあり方ということ、細やかに御検討いただけたらと思います。

もう1つございます。それは、私、2040までということ、ふと我に返って考えてみたのですが、ここにいる私たちは、2040は後期高齢者になっているし、資料によると日本の2.7人に一人が65歳以上で、その2.7人のうちには赤ちゃんも入るわけです。2040までのプログラムは、その東京の中で実現していくことなのだというのを改めて思いました。クラシックの現場では、前にも申しあげましたけれども、既に人の流れが変わっていて、夜の公演はお客様は減少傾向があるのに対し、昼間は増えている。それから都心のホールではなくて地域の区民センターのほうがアクセスがいいのでそちらに行く方も多くなるなど、既に変わっていることがあります。2040までのプログラムもそういった様々な変化を現実的に考えた上でのあり方というものをお考えいただけたらと思います。

オリンピックのレガシーは何かというと、プログラムの継続ということの上に、その後の社会的な環境にマッチするあり方を、このオリンピックでつくったということではないでしょうか。オリンピックのプログラムが「華やかな打ち上げ花火で終わった」と言われないうように、その後につながるあり方をつくったとなるように考えていただけたらと思います。

○**青柳会長** ありがとうございます。ほかに、それではまだ御意見がおありでしたら、後でお願いしたいと思います。

事務局から説明がございましたように、芸術・文化は人や都市に活力を与えるだけでなく、福祉や教育、まちづくりなど、さまざまな領域に前向きな変化をもたらすソフトなインフラと言えるかと思います。そういった芸術・文化の特性を生かし、東京が文化の面でも今以上に大きく輝くことはもちろん、芸術・文化の振興により都民の幸せや都市東京の発展にも貢献していかなければならないと思います。そのためには、その道標となる文化政策の検討が欠かせません。引き続きどうかよろしく願いいたします。

ここで小池知事は公務のため退席されますが、何か。

○**小池知事** ぜひ2020大会が全てのゴールではなくて、むしろそこからまた新たなスタート、出発になるというような意識で、また世界に通ずる、世界に発信するアート、文化をこれからも発信し続けていきたいというふうに思っております。貴重な御意見をありがとうございます。またいろいろ現場でもお世話になっております。ありがとうございます。失礼いたします。

(小池都知事 退室)

○**青柳会長** それでは、次に移りたいと思います。議事の(2)でございますけれども、「Tokyo Tokyo FESTIVALの展開及びプロモーションについて」、事務局よりまず説明をお願いしたいと思います。

○**魅力発信プロジェクト担当部長** それでは、「Tokyo Tokyo FESTIVALの展開及びプロモーションについて」、御説明をさせていただきます。

まずプログラム展開についてでございます。2020年を文化の面から盛り上げる「Tokyo Tokyo FESTIVAL」、TTFでございますが、非常にさまざまなジャンルがございますので、まず個別のプログラムの取組につきまして、その一部を紹介させていただきます。

最初に、TTFを象徴するプログラムといたしまして、「Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13」を御紹介いたします。これはTTFの目玉事業といたしまして、幅広く企画、アイデアを募り、国の内外から応募ございました2,436件の中から選ばれた、特別な13の企画でございます。時間の制約もございますので、一部の企画につきましてかいつまんで御説明いたします。

まずスクリーン右上でございます。隅田川を1つの大きな舞台と見立てて、隅田川流域を使ってさまざまな音楽やパフォーマンスを展開する「隅田川怒濤」。左下でございます、世界の貴重な無形文化遺産が東京に集結する「世界無形文化遺産フェスティバル2020」。次のページでございますが、左上、日本独自の生活文化である銭湯の魅力をペンキ絵アートなどで発信する「TOKYO SENTO Festival 2020」、隣、右上でございますが、公募で集まりました高齢者とアルゼンチンの演出家がともにつくり上げた演劇作品を出演

者が観客とともに移動しながら展開するツアー型演劇「光の速さ」。次のページをお願いいたします。左上でございます。世界中から募集して選ばれたたった一人の实在の人物の顔を東京の空に浮かべる「まさゆめ」。右上でございます。ロボットアームが枯山水のような模様を描く、テクノロジーとアートが融合した大型展示「The Constant Gardeners」、こういったものがございます。また、13件の企画のうち1件はシークレット企画として、後日発表を予定しております。

なお、昨年11月にはライゾマティクスにより「Coded Field」が、芝の増上寺におきまして大変盛況なうちに終了いたしましたことを申し添えさせていただきたいと思っております。

次のページをお願いいたします。

さらに、日比野評議員に監修をお願いしております「TURN」でございますが、来年度は「TURNフェス」を、国の内外のアーティストや多様な施設、機関と協働しながら、複数の会場で大規模に実施いたしますほか、野田評議員が監修されております、日本各地で文化交流をしながら新しい表現を目指しております「東京キャラバン」につきましても、来年度はこれまでの集大成として大規模に展開していこうと考えております。

次に、大野評議員総合プロデュースのもと、今年度から実施しております「オペラ夏の祭典2019-20」でございます。来年度は2月に「ニュルンベルクのマイスタージンガー」を上映いたします。

続きまして、「サラダ音楽祭」です。春に日比谷野外音楽堂でポップスコンサートを開催いたしますほか、9月にはパラリンピックの終盤の時期に合わせまして、東京芸術劇場で開催いたします。前回64年大会を記念して創設されました東京都交響楽団の演奏が、パラリンピック終了とともに、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のフィナーレを飾ってまいります。

続きまして、都立文化施設でございます。

都立文化施設では、大会期間を中心に、都民の方はもとより、国の内外から訪れる方々を、各館の特徴を生かしまして、趣向を凝らした展覧会、演劇、コンサートなどでお迎えをいたしてまいります。

次のページ、助成でございます。民間への助成を通じた連携、ご覧のように多数ございます。こういったものと、次のページをお願いします。都庁内各局、あるいは都内の区市町村との連携によりまして、都内全域で祝祭感を演出してまいります。

このほかにも、大会期間中には、選手や大会関係者、国の内外から訪れる観光客等々の方々に向けて、さまざまな場所で日本の伝統文化や伝統芸能を身近に体験、鑑賞できる機会を提供してまいります。

TTFの展開については以上でございます。TTFの多彩さ、あるいは来年度大会に向けて、質・量ともに充実していくさまを改めて確認いただければと存じます。

続きまして、プロモーションについて御説明をいたします。

ただいま御紹介いたしました多彩なプログラムから構成されるTTFでございますが、いかにその魅力を伝え盛り上げにつなげていくか。そのための考え方として、まず、今後のプロモーションにつきましては、TTF全体のPRに加え、「スペシャル13」やその他の各プログラムを具体的に紹介し、その魅力を伝えてまいります。

その中でも特に象徴的なプログラムでございます「スペシャル13」につきましては、それをフックとして重点的に取り上げることで、TTF全体の周知へとつなげていきたいと考えております。また、PR展開そのものに話題性を持たせることで、TTFが本来求めています革新性や独創性のみならず、幅広い層にその「楽しさ」もアピールしていきたいと考えております。加えて、大会期間を中心に訪日する多くの外国人に対しましては、海外メディアや海外都市でのPRを活用し、これまで以上に発信に努めてまいります。

こうした方針のもと、2020年度におきましては、各プログラムの実施時期などをもとに、2つの集中的な広報期間を設けて、より効果的な広報を実施したいと考えております。

画面、赤い線で囲んだ部分に御注目いただければと思います。

まず1つ目の時期でございますが、5月です。スケジュールを見ていただけるとおわかりいただけるかと思いますが、非常に多くのプログラムが集中しております。また「スペシャル13」のプログラムの幾つかも開催時期が重なっております。この時期、メディアへの働きかけを積極的に行うなど、多くの方にプログラムに触れていただくことで、TTFの理解を深めていただきたいと、このように考えております。

続いて2つ目の時期、7月のところをご覧ください。申すまでもなく、大会直前の時期でございます。大会への期待感も高まってくると思いますが、こうした中、「スペシャル13」のプログラムを初め、大会期間に行われる事業の開始直前期でもありますので、例えば主要駅でサイネージジャックを行うなど、さらなる機運醸成に向けて取り組み、TTFの盛り上げもピークに持っていきたいと考えております。

以上の考え方を踏まえまして、現在展開を検討しております主な取組の例につきまして、幾つか紹介していきたいと思っております。

まず、フックとなる「スペシャル13」を中心に、幅広い層へTTFの、これは楽しさを伝えるための積極的なメディアプロモート、すなわちメディアへの売り込みでございます。続いて、サイネージジャックなど、それ自体が話題性につながるようなインパクトのあるPR。また、毎年多くの方に参加いただいております花火大会の機会を活用して、例えば画面でございますような、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の文字を映し出すような文字花火ですとか、TTFをイメージした青を基調とした花火の打ち上げ、さらには、SNSを活用し、一般の方にアート体験を投稿してもらうような、参加型企画による情報拡散なども検討してまいります。

また、大会期を中心とした海外に向けた発信といたしましては、都が設置する東京都メディアセンターでのPRにも取り組んでまいります。そのほかにも、TTFの各プログラムを紹介した「プログラム冊子」の制作・配付、より多くの方にTTFの魅力や情報を伝えるため、TVCMの放映やラジオ番組への情報提供、訪日外国人の方々が利用するおでかけ系サイトの活用、さらには自治体国際化協会「CLAIR」でございますが、そのロンドン、パリ、シドニーなど海外の7つの事務所を通じまして、現地のイベントなどでのPRも展開してまいります。

また、文化に関する国際会議、World Cities Culture Forum、WCCFなど、これまで都が培ってまいりましたネットワークを最大限に活用すること、そういったことも考えていきたいと考えております。

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の展開及びプロモーションにつきましての説明は以上となります。

○青柳会長 ありがとうございます。ただいま事務局より説明がありました「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の展開及びプロモーションにつきましては、文化プログラム推進部会でも議論いただいておりますので、部会長の吉本評議員のほうから補足がありましたらよろしく申し上げます。

○吉本評議員 はい、ありがとうございます。追加の資料、今配っていただけますか。

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」、いよいよ4月からピークというか、盛り上がっていくことになっていて、今、都庁も、それから財団も、文化施設も、アーツカウンシルも、それに向けて本当にてんやわんやな状況ではないかと思えます。ですので、個々の事業については、プランどおり一つ一ついい事業ができたらいいなというふうに思いますが、今のご報告の中にもありましたが、部会で議論したことで4点補足説明させていただいて、評議員の先生方の御意見を頂戴したいと思います。

1点目は、TTFのための広報拠点をつくれなかなということでございます。部会でも検討して、7月になったらオリンピックのメディアセンターができるということだったんですけども、それではちょっと遅いんじゃないかと。4月から盛り上がる時期に、新設は難しいとしても、都立の文化施設、上野の文化会館とか美術館、あるいは池袋の芸劇等々、いろんなところがありますので、その中で拠点をつくって、それなりのしつらえをして、そこに行けばTTFのことが全てわかる。できればそれを知り抜いたコンシェルジュのような人がいて、聞かれると答えられる。その人はバイリンガル、トリリンガルだったりしたらベストというような、どこまでできるかわかりませんが、そういう広報拠点を作れないか、というのが1点目でございます。

2つ目は、今ご報告のあった海外広報なんですけれども、これはとても重要だというふうに思えます。外国人に見に来ていただくということはもちろんなんですけれども、東京はオリンピックでこういうすばらしい文化プログラムをやったという実績がいろんな海外

メディアに出ていくということが、東京の文化的なプレゼンスを高めるという点で極めて有効だと思います。

部会で検討した英語のキーメッセージの「THE FUTURE IS ART」については以前もご報告しましたが、これは例えばBBCのニュースに取り上げられて、最初のテロップで、「THE FUTURE IS ART」と流れて、東京はこんなことをやりましたというふうに使われるといいねという議論もあって、この言葉を実は選んだという経緯があるんですね。ですので、海外メディアはいろいろやってきますけど、滞在中は相当忙しいはずですから、事前にメディアを捕まえてちゃんとアポを取って取材してもらおうとか、あるいはできるかどうかわかりませんが、NHKと相談して「スペシャル13」の企画に焦点を当てた番組をつくってもらってBBCとかフランスの国営放送に売り込むとか、何かここはぜひもうちょっと積極的にできたらなというふうに思います。

3点目がプログラム冊子です。今追加の資料をお配りいただいたんですけど、きょうも机上にキービジュアルを使った資料が配られていますけど、それと同じデザインで冊子を作りたいというご説明が、この間、事務局からあったんですけど、部会では、ちょっとこのキービジュアルは弱いねという意見が大勢を占めています。特にこの写真、よく見ると、渋谷のスクランブルだったり、富士山だったり、あるいは島が入っていたり、いろんなところに配慮されているんですけど、これじゃあちょっと何か弱いねと。

そのときの議論でたまたま出たアイデアの1つがお手元にお配りしたもので、きょうは浅葉先生がいらっしゃるので、これを出すのはとてもひやひやなんですけれども、「スペシャル13」でやった実績を写真でビジュアルに使って、それでキーメッセージを頭のところにを入れるという案です。冊子は五、六十ページのものになりますので、こういうものが置いてあるといいんじゃないかと。この写真はもちろん「TURN」や「キャラバン」もありますし、開会式が近づいてくるとシークレット企画も出てきて、「スペシャル13」そのものが訴求力があるので、それを使ったらどうかというのが3つ目でございます。

4点目は、プロモーションについてです。イベントを行うまでのことは今御説明があったんですけど、実は終わった後、東京はこんなことをやりましたよというのを発信するというのもとても重要だと思うんですね。例えばロンドン大会の文化プログラムって、行ったことがない人もすごかったとみんな知っているという状況があります。それはやっぱり事後のプロモーションというか、写真集をつくったり、キーパーソンが東京に来てレクチャーをしたり、青柳先生も文化庁長官のころにお目にかかっていたと思いますけれども。そういう事後の広報活動も視野に入れて、実績をちゃんとアピールできるような準備をしていくということもとても重要だと思います。ぜひ次のパリなりロスから、東京の実績を教えてよというオファーが来て、それにちゃんと答えられる、そんな体制も組んでいただけたらなというふうに思います。

以上4点について、評議員の先生方からも御意見をいただければと思います。

○青柳会長 ありがとうございます。それでは、今、吉本評議員がおっしゃった4点を中心にしながら、いろいろ御意見をお聞きしたいと思うんですが。よろしくお願ひします。

○キャンベル評議員 ありがとうございます。3つ、4つかもかもしれません、申し上げたいことがあります。

1つが、この告知手段について、先ほどお話があったんですけども、これも庁内SNSを使って、あるいはテレビ局、いろんなメディアの協力を得てやっていくと思うんですけども、先ほど「スペシャル13」を中心に、時系列で4月5月からずっと9月10月までの流れがある。それを割と計画的、インバウンドの方々もそうですけれども、我々東京で生活している者が、全てを計画的に選択的に選定して行動するわけではないんですね。

私は先日、この写真は多分ダンストラックだと思うんですけども、たまたま遭遇したんですね。タクシーに乗っていて、それがたまたま渋滞でとまって、結構ゆっくり見ることができたことはとてもよかったんですけども、そういうセレンディピティと言いますか、遭遇、幸運にもそこに行き当たるという。それを見て次に何かがある、ということ、一日の流れであったり、次の週末につながってシナジーが働くと思うんですね。

そうしますと、1つの流れとしてそれがどういうふうにあるかということ、リアルタイムで常に見ることができる、アプリであったりソフトであったりというコミュニケーションのツールというよりも、方法ですね。そこを常に、ぐつぐつ沸いているようなものとして、あるいは発酵しているというようなイメージで、動態としてイベントがつながるように、そのときにちょっと空いた時間、ちょっとそこに行くからすぐ近くまで行けばいいというような観点というか生活に密着した存在にまで近づける工夫をしてほしいと思います。

特に、働き方改革などではすごくどんどん進めていて、フリーアドレスで働いている人たちが私の周りにはたくさんいますので、どこかに集まって、先ほど仲道さんの話もありましたけれども、例えば夜どこかにみんなが集まるということだけではなくて、たまたまということが、非常に自分がある場所から重要なので、それを逆手にとって、告知の手段ということ、流れとして動態として考えて、そこはやっぱり出していついていただきたいなというふうに思いました。

もう1つ、一番最初に、カルチャーパスが紹介されていましたが、これが全部東京都の施設ということですね。東京の外から、あるいはインバウンドの人たちが、何が東京で何が国か、あるいはそれぞれの民間事業かということが識別ができない、どうでもいいことなので。このカルチャーパスを含めて、もっと横断的に国の施設等、そういったものを、今からできることを今考えて申し上げているんですけども、できるだけそこを連携して、実施主体が見えないように、むしろすべきだというふうには思います。

もう1つ、地域、ロンドンのオリンピックのことを考えますと、イーストエンドですね、一番所得が低い人たちが従来住んでいたところを再開発をするということが大きな目標だ

ったわけですがけれども、まちがどういうふうになるか、実際に空間、雰囲気がどういうふうになるかということに立ち会ってもらおうということが非常に重要なんです。

東京はかなり広域的、多摩地区、西のほうは私はちょっと弱いと、今までの取り組みが弱いように感じますけれども、しかし、東京がどういうふうになるかということを見守っていく、立ち会っていく、それから尋ねた人たちが何か残して帰っていくというような、発信型ではない、やはり共振あるいは更新していくということ、できるだけ決まった事業の中で織り込んでいく、そういうスタンスでやっていけるといいなというふうに思いました。

テレビで言いますと、先ほど吉本委員のお話にあったんですけれども、私は「NHKワールド」で長く番組を持ってつくっているんですけれども、「NHKワールド」と東京都の連携ということは全く聞かないんですね。ですから、「NHKワールド」は非常に、海外に行きますと、これは非常に主観的な、皮膚感覚ですけれども、僕がいろんなところ、イタリアとかシンガポールとかいろんなところに行きますと、呼びかけられるんですね。テレビで日本のこととかというふうに、結構「NHKワールド」が取り上げられていて、地元のメディアの中では非常に浸透しているメディアでもあると思いますので、そこはちょっと使わない法はないと思いますので、これは当然予算を投入しないとけないと思いますけれども、そこはできると思いますので、「スペシャル13」で本当にドキュメンタリーのシリーズを、やっぱり今からであれば、テレビ番組であれば企画は立つと思いますので、進めていただきたいと思います。

最後ですけれども、吉本さんがおっしゃったとおり、キービジュアルについて、これはあかんと思います。これは、つまり何かを伝える。何かを非常に具象的に、富士山であるとか、外国人が扇子を持っているとかという意味を、メッセージを、非常に1対1で伝えていくということなので、東京、日本には、非常にすぐれたアート写真家であったり、この写真であるならば、もう1つそこが深いところ、奥行きがあつて、訴求力が強いイメージをつくることができますので、こういうイメージ写真ということをもっとやっぱり大切にしてつくって、創造的につくっていただきたいなというふうに思いました。

すみません、乱雑ですけれども。

○青柳会長 ありがとうございます。浅葉さん、これ何かありますか。

○浅葉評議員 しかけはおもしろいんだけど何も出てこないよね。もうちょっとやり方あるよね。

この中で、僕は7月の「石岡瑛子展」というのは絡むんじゃないかなと思うんですけど。

○青柳会長 7月の。

○浅葉評議員 ええ、石岡瑛子ってありますよね。これが元資生堂にいたアートディレクターで、ニューヨークに行って、コッポラと映画をつくったり、いろいろ展開するんですけれども、僕は先輩だと思っていたんですけれども、もう彼女は、私はライバルだと言

われて、何かやらなきゃいけないかななんて。一応インタビューは受けて、その時代の、80年代ですね、一番彼女が輝いたのは。その話はしましたけれども。

○青柳会長 ありがとうございます。今、吉本委員、それからキャンベル委員がおっしゃったように、4つのポイント、それから特に広報拠点、あるいは海外広報に関してのところあたりは、ぜひぜひもうちょっと力を入れてやっていくと。それからパンフレットも大変重要なものになるので、もう一回デザインを考えていただければと思います。

それから、NHKのほうは、おっしゃるとおり、オリンピックを統括する部局が、局長級の人がトップになってやっていますので、その辺もぜひぜひ接触して、うまく都としてNHKを使うといいと思いますね。

○キャンベル評議員 そのときに「NHKワールド」が……。

○青柳会長 そうですね、海外に対してですね、本当に。ありがとうございます。どうぞ。

○日比野評議員 文化プログラム、今日は東京都、文化庁もやっている、組織委員会もやっている、きっとメディア側とか、国民、してみれば、享受するほうからしてみれば、その仕切りは関係なく、そこのところというのは、青柳先生も吉本委員もいろいろかかわっている会があると思うんですけども、例えば広報に関してというのは、互いに確認して、何か一緒にというのは難しいのかもしれないですけども、テクニク的にはいろいろクリアなくちゃいけないことがあるかもしれませんが、何かメディア側に立ったときに、例えば違う広報物が3つあって、さっきの時系列でどうやって、こっちがこっちでとなると、デザインも違ったりするとなかなか行きにくい。でも何か1個になっているものがあると、それはメディアにとっては優しいですよ、取材に、じゃあこの時間にここに取材に行って、午後は都の主催のところに行こうとか。そういう連携というか、というのは、何かさっき青柳先生、連携と言われましたけれども。

○青柳会長 一応3者の、内閣とそれから組織委員会と、東京都の連絡協議会みたいなものはあるんですね。それでいろいろやっていますので、その結果としてその広報のパンフレット等や何かも同じ場でなると、本当のシームレスになっていいんじゃないかとは思いますがね。なかなか難しいところもあるんでしょうけれども。その辺もぜひぜひ御検討ください。はい。

○太下評議員 大きく2点あります。1点目は、「未来の東京」戦略ビジョンについてで、10年後の戦略ビジョンというものがまとめられており、小池知事らしく国際色豊かになっていると思います。そして、この10年で考えたときに、東京が世界から注目される最大の機会が、恐らく実は今年ではないかと思えます。オリンピックという最大の機会です。

実はこのオリンピックに関しては、国際オリンピック委員会、IOCも、この東京大会に対して、我々が想像している以上に強い期待を持っていると思うのです。それはどうい

うことかという、東京の次の2024年パリ、そして2028年がロサンゼルスと、これら2都市が一括して決まっているわけですが、このように先々の都市が一括して決まるということは、実は96年ぶり、オリンピックの歴史の中では極めて異例なのです。

何でそういうことが起こったのかというと、御想像つく方もいらっしゃると思いますが、2024年のこのコンペティションの時に、最初は5都市立候補したわけです。ブダペストとハンブルクとローマとパリとロサンゼルスでした。だけど、結局残ったのは2都市だけだったのですね、パリとロサンゼルスです。ほかの都市はみな、実は住民の反対運動とかで辞退していったのです。日本で暮らしていると、オリンピックをみんな大好きなので、まさかオリンピックに正面切って反対するなんていうことは想像できないと思うのですが、これが世界の潮流なのです。すなわち、もしかしたらオリンピックは持続できないかもしれない国際イベントになっているということです。

そして、このパリ、ロサンゼルス、東京は、みな二度目、三度目の開催都市なのです。最初に開催する都市においては五輪の効果の説明が比較的しやすいわけです。五輪に伴ってインフラが整備されて、それが恐らくその後の経済的、社会的発展の基盤になります、ということです。しかし、二度目、三度目の成熟した都市がオリンピックを開催する理由については、IOCも説明ができないのです。説明できないからこういう状況になっているわけです。

恐らく、その説明をできるようなレガシーを東京が残してくれるのではないかという強い強い期待を、我々が想像している以上にIOCは東京に対して抱いていると思うのです。これが1点目です。

そう考えたときに、この「未来の東京」戦略ビジョンがあらためて重要になるわけです。このつくり方は、バックキャストという手法を導入しています。未来がどうだったかということの先に考えて、そこからさかのぼって具体的な戦略を考えるという、そういう手法をとっています。

先ほどの吉本さんのお話の中でも、4点目の中で、終わった後の発信が大事ですよというお話がありました。これは我々もロンドンオリンピックの後に経験したわけです。実にさまざまな報告書、映像等がたくさん出てきて、いかに彼らがすごいことをやったのかというのが伝わってきたわけです。

そう考えると、多分ことしの秋か冬の頃には、我々も実はこんなすごい東京五輪を実施したのだというレポートを出すことになるはずです。そして、そのダイジェスト版のエグゼクティブサマリーも出すはずです。そこには、例えば8個とか10個とか、極めて限られたことしか訴えられないと思います。その限られた項目の中に、私たちは何を書くことができるのかということがとても重要なこととなります。それこそバックキャストの手法を導入することによって、今のうちから仮説的に書いておくべきだと思うのです。

そのようにして書いた目標に対して、今ある個々のプログラムが十全に機能し得るのかということを検証して、もっと補強すべきところは補強し、強調すべきところは強調しといったことを、今からあと数カ月間にやっていくべきだと思います。

その中には、当然この中にうたわれている長寿を世界語に、という項目も入ってくると思います。御案内のとおり、日本は世界で一番早く、最大規模で超高齢国家になったわけですが、この超高齢国家になった国に対して、文化・芸術がどう応答できるのかということが重要な政策課題になります。多分スポーツでは超高齢国家に対して応答しづらい中で、文化プログラムの役割は非常に大きいと思います。そして、文化芸術で高齢者がすごくハッピーであるという姿とを世界に発信することができれば、恐らく世界中の国が日本に習いに来るだろうと思います。

そういうようなレガシーを8個とか10個とかあらかじめ設定した上で、この文化プログラムというものをどういうふうに具体的に練り上げていけるのかというのを、今議論すべきだと思います。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。どうぞ。

○仲道評議員 私、先日海外にいたときに、偶然BBCの番組を見たのです。その番組では東京を車椅子で移動してみるという実験のようなことをしていて、どのくらい動けるものなのかということを実際にやってみるというものでした。まちのそこかしこが映って、こんなところでこんなにスムーズだったとか、ここはなかなか難しいとか、私たちのまちと比べるとどうなっているとか、すごく生活に密着した視点で東京というものを捉えていました。今の太下さんのレガシーということにもつながるのですけれども、華やかなことはもちろん行われるし、それも続けていって、魅力ある東京をつくるのですが、それと並行して、実際のその東京というまちが、社会が、人々が、このオリンピックがあったことによってまた生活としてどう変わっていったのか、何が起きたのかということ、しっかり丁寧に生活に密着した視点から見せていくことが本当のシンパシーになるのではないかなと思いました。テクノロジーや最先端のアートというのはどんどん書きかえられていくので、今東京ですごいことがあっても、他の国や地域からまた次なるものが出てきて、「あれはこの間まで新しかったけど今はもう…」とすぐなりますよね。だからそこを追い求めつつも、やっぱり生活に密着した魅力というものをどう伝えていくのか、どう考えていくのかということが、2040までのレガシーになるのではないかなと思います。

○吉本評議員 先ほどキャンベルさんのお話にあった「NHKワールド」って、確かにありますよね。僕も海外に行ってテレビをつけるとついつい見ちゃったりするんですが、ああ、日本ってこうなんだって逆に知ったりします。あれ、東京のホテルでも見られるんですかね。

○キャンベル評議員 東京では、ストリーミングでしか、インターネットを、NHKの

チャンネルからしかそのときに見られないですね。オンデマンドは若干ありますけれども、普及していないですね、国内では。だから国内の電波には乗っていない。

○吉本評議員 部会で議論したときに、部会のメンバーに「タイムアウト東京」の伏谷さんがいらっしゃるんですけど、「タイムアウト東京」って都内のホテルの何か所と言いましたかね、主要なホテルに大体あるんですって、部屋に。それで「タイムアウト」で特集してもらうのが一番いいねという話になったんですけど、実はそう簡単ではないそうなんですよね。

なので、「タイムアウト東京」のような媒体で、さっきの日比野さんの話ですけど、都のTTFも、文化庁のも、それから組織委員会のも一緒に特集を組んでもらったりするしつらえのほうが、東京都のものだけ掲載するよりいいかもしれないという話が出ていましたので、そんなことが実現するといいなと思いました。

あともう1つ、今の仲道さんのお話なんですけれども、部会のメンバーに射撃のパラリンピアンの方の田口さんがいらっしゃるんですけど、田口さんから毎回、TTFは必ず障害のある人も誰でも参加できるような仕組みにしてくださいねとずっと言われているんですけど、現実にはなかなかそこまで手が回っていないというような状況があると思うんですけど、もちろんいろいろやられていると思うんですけど、ですから仲道さんのお話を伺って、田口さんの御意見をまた思い出しましたので、ぜひTTFをきっかけに、全ての都立文化施設を含め、障害者をはじめ、誰もがちゃんと行きやすくなるというようなことをソフトのレガシーとして残せればなと思います。

○青柳会長 ありがとうございます。どうぞ。

○キャンベル評議員 今お話を伺っていて思い出したのが、海外のメディアがそれぞれプレスセンターあるいは事前キャンプがあって、そこに報道が多分4月、5月から盛り上がっていくと思うんですけど、意外なところに目をつけていて、それは100%というか、半分ぐらい、恐らく我々国内から見るとネガティブなものであったり、日本社会の課題であるとか、光が当たらない人たちであったりという、あるいは自己矛盾であったりということ、かなり鋭くオリンピック・パラリンピックが1つのきっかけとして、いろんなことが見える社会でこぼこがいろいろ見えるようなものだということは、その都度に、リオでもそうでしたし、北京でもそうだし、特に欧米のメディアというのが、そこは特にシビアであるとか厳しいとかということではなくて、それが報道だという常識なんです。

ですから、このにぎやか、にぎわいをつくるということ、文化・芸術のにぎわいの中に、余りきれいに、日本は特に、先日も国の1つの指標評価としては分断が少ないということが経団連の方々から発表されたということが新たにあったんですけど、確かに分断は少ない、表面化されにくい社会ではあるけれども、ないわけではないんです。

ここで言うことがふさわしいかどうかわかりませんが、去年の夏のあいちトリエ

ンナーレですね。あいちトリエンナーレは国だけではなくて日本の言論であるとか表現を
するとかということをや非常に大きな損失をしているように思います。これはクリエイター
たちだけではなくて、何か物事が言えるか、言えないのか、見えるか、見えないのかとい
うところで、東京都としてはそれは何か取り戻すとか、改善をするということをや大上段に
振りかぶってやる必要はないかもしれませんが、ただ、そういったところにも、む
しろそこを隠さずに、これから解決しなければならない課題として、アーティストたちで
あったり、アスリートたちであったり、あるいはジャーナリストと一緒に見て、経験をし
て、報道していただくということをや、先天的にといいますか、先にそれをある程度考えて、
環境を整えるべきじゃないかなというふうには思います。

そうしませんと、本当にこれは完全にそれぞれの海外のメディアであったり、エキス
パートも入ってくるわけですよ、それぞれの分野で。本当にぐいぐい入っていて、そう
か、日本にはすごくこういうふうに言ったり、東京都はこういうふうに言っているだけ
けれども、全然そうじゃないじゃないかというようなことに、また別の意味で片寄った報道
であったりということになるわけですね。

ですから、そういう芸術・文化の祭典ということは、全て、これはあいちトリエンナー
レの中でも議論されたわけですけども、全てハッピーであるというわけではないし、さ
せる必要もないし、すべきではないというふうには私も思うので、どういうふうには、自治体
として、東京都として、そこにどういうふうにかかわって関与していけるのかというこ
とをや、今からやっぱり考えてつくっていったらいいんじゃないかなというふうには
思います。ちょっと抽象的な話ですけども。

○青柳会長 ありがとうございます。キャンベルさんがおっしゃるとおり、芸術とい
うのは優美で美しいというようなことだけではなくて、ある意味ではある狂気があつたり、
あるいは人の心情を逆立てるような、そういうものまでもあるのが芸術であつて、そして
そういう芸術があるからこそ、我々は芸術から社会の先進さとか、新しさを、ある
いは、おりを流し去ることができるんですね。ですから、そういう両面性を考えながら、や
っぱり文化とは何かということをや、我々は常に考えていかなきゃいけない。

それから、今回も特にTTFなどで、いろんなことをやると、その反対に、課題に向き
合ってきているから、それをしっかり認識することが大きなレガシーになっていくの
ではないか。その辺は、ぜひぜひこの評議会では時間も限られているので、文化プログラム推
進部会と、それから文化政策部会があるので、ぜひ御議論していただいて、それからまた、
アーツカウンシル東京もありますから、そういう方々で十分に検討していただいて、この
評議会に出していただいて、皆様の御意見を聞くというような方向で考えていきたいと思
いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

それと、最初の太下さん、政策部会のほうで、何か言い足すことはもうないですか。

○太下評議員 さっき言いましたので大丈夫です。

○青柳会長 そうですか。

それでは、ありがとうございました。いよいよオリンピック・パラリンピックイヤーの幕開けとなり、文化の面からも今年を目指して準備を進めてきた「スペシャル13」を初め、5年間の集大成を迎える「TURN」や「東京キャラバン」、それからオペラに「サラダ音楽祭」と、イベントがメジロ押しでございます。美術館、博物館では、東京を訪れる国内外の観光客をもてなす展覧会が開催され、民間団体や区市町村とも連携し、東京全体でさまざまな事業が開催されます。また、プロモーションを効果的に実施することで、より多くの方々に参加してもらい、芸術・文化に触れてもらうきっかけを提供していきたいと思えます。

事務局としては、9月の大会終了まで正念場でしょうが、しっかりと頑張っていたきたいと思えます。

それでは、事務局のほうから御報告をお願いいたします。

○文化施設改革担当部長 はい。報告事項2点ございます。

1点目、庭園美術館の条例制定について、御説明させていただきます。

東京都庭園美術館につきましては、昭和58年に開館して以来、普通財産として利用してまいりました。平成23年度から、順次大規模改修工事を実施いたしまして、平成30年3月に総合開館したことにより、恒久的な美術館としての形が完成いたしました。

そこで、これを機に、都民の貴重な財産である歴史的建造物、旧朝香宮邸と美術作品、庭園とが一体となった庭園美術館を、公の施設として位置づけることといたしました。

このため、現在、東京都庭園美術館条例の制定に向けまして、準備を進めているところでございます。

本件につきましての説明は以上でございます。

○文化総合調整担当部長 続きまして、アール・ブリュット振興拠点となります、東京都渋谷公園通りギャラリーのグランドオープンにつきまして、御報告いたします。

アール・ブリュットは、専門的な美術の教育を受けていない人などによる独自の発想や表現方法が注目されるアートをあらわします。その振興拠点としまして、東京都渋谷公園通りギャラリーが改修工事による約2年間の休館を経まして、来月、2月8日にグランドオープンいたします。

本施設では、アートを通してダイバーシティの理解促進や、包容力のある共生社会の実現に寄与するため、アール・ブリュット等を初めとするさまざまな作品の展示や、対話的で創造的な交流プログラムを展開してまいります。

グランドオープンに当たりまして、皆様に親しみを持っていただけるよう、新たにロゴマークを作成いたしました。人と感嘆符をモチーフに、多様性の中で発見する驚きや気づきを表しています。また、あみだくじのようなシルエットにすることで、偶然の出会いや自分では想像もできないことにめぐり会えることを表現しています。

今回の改修で、渋谷公園通りに面したガラス張りのスペースが交流スペースとして生まれ変わります。この交流スペースでは、ワークショップやコンサートなど、アーティストと来場者の方が関わり合い、呼応しながらつくり出されるプログラムなどを展開していきます。ガラス張りという特徴を生かしまして、公園通りを行き交う人々にアピールしながら、多くの方の来場につなげたいと考えております。

展示室につきましては、空調設備の更新や、作品の魅力を効果的に引き出せるよう、照明をより細かな調光が可能なものとするなどの機能改善を行いました。また、より多彩な形式での展示ができるよう、可動式の壁を導入しました。

利用者向けとしましては、車椅子昇降機を停電時でも対応できるものに更新するとともに、授乳などにも対応できるスペースを新たに確保するなど、障害がある方やお子さん連れの方など、さまざまな方に利用しやすいように改善を図りました。

2月8日から4月5日まで、グランドオープンを記念した展覧会を開催します。また、会期中の週末を中心としまして、展覧会の出展作家やミュージシャンによるパフォーマンスやライブなどを行います。ぜひ多くの方に足をお運びいただき、アール・ブリュットの魅力にふれていただきたいと思います。

東京都渋谷公園通りギャラリーにつきましては以上となります。

○青柳会長 どうもありがとうございました。

以上で本日の日程は全て終了いたしました。第29回の東京芸術文化評議会をこれにて終了したいと思います。どうも今日はありがとうございました。

以上